

鈴木有郷牧師説教

12/12/2010 雄々しくあれ、恐れるな イザヤ 35:4-7

旧約の預言者イザヤは、イエスが生まれる500年前に救い主の到来を予言して次のように言っています。

彼は弱った手に力を与え、よろめく膝を強くする。彼は心おののく人に言う「雄々しくあれ、恐れるな。」

イザヤは続けて言います。「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がり、口の利かなかった人が喜び歌う。」

つまり、預言者イザヤにとって救い主は、病を癒し、落胆した人に勇気を与え、弱った者を力づける愛と慈しみの救い主です。

しかし、にも関わらず、預言者イザヤの救い主理解は、イスラエルだけを守り、その敵を打ちすえる権力者としてのイメージを完全に払拭しきっていませんでした。それは彼の以下の言葉に明らかです。

「見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、敵に報いる神が来られる。神は来てあなたたちを救われる。」

イザヤにおける癒しと慰めと和解の救い主は、一方において、イスラエルの敵を打ちすえる復讐の主という矛盾をその中に潜めていたことは否定できません。

キリスト教の福音の特徴は、イザヤの救い主理解の矛盾を完全に取り払ったところにあります。つまり、癒しと慰め、愛と慈しみを強調し、力による復讐という点を取りのぞいたのです。

それは新約聖書の中で、どのような具体的な姿を取ったのでしょうか。癒しと慰め、愛と慈しみをもたらす救い主は、飼い葉桶の中にすやすやと眠る幼子、家畜や外国人の知恵者や貧しい羊飼、一介の大工とその若妻に囲まれた赤ちゃんという姿を取って現れるのです。

何故幼子なのでしょう。何故家畜小屋なのでしょう。何故彼を囲むのが、この世の栄華と栄光に無縁な異国の天文学者と貧しい羊飼なのでしょう。

それは、幼子こそ最も近づきやすい存在だからです。誰もが、自分を飾ることなく、ありのままの自分で、救い主とまみえることができるからです。家畜小屋の飼い葉桶に眠る幼子を誰も恐れる必要はないからです。

この世の権力は人間を強者と弱者に分け隔てます。この世の富は人間を富者と貧者に分け隔てます。この世の栄華と栄光は、人間を本当に人間らしくあらしめることはできません。人と人との間に壁をつくり、中垣をはりめぐらしてしまいます。猜疑心、憎しみ、恐れを生み出しています。そこに愛や慰めや和解の源を求めることはできません。

キリスト教の信仰にとって、飼い葉桶の中ですやすやと眠る幼子のイメージは不可欠なものです。それは、神と人との間にいかなる隔ての壁もない、誰でもが神にありのままの姿で近づくことができるという真実を象徴しているからです。

確かにこの世の力は、私たちを一時的に弱らせたり、困らせたり、誘惑したりすることはできません。しかし、私たちを奴隷にすることはできません。飼い葉桶の中に眠る幼子を巡るエピソードに現れる優しさ、静けさ、平安、慈しみ、愛、これこそが私たちを本当に人間らしくあらしめる原動力です。

イザヤは言っています。「雄々しくあれ。」荒野で野宿していた羊飼いに天使のコーラスは呼びかけます。「恐れるな。」

ですから、雄々しく生きようではありませんか。何事も恐れることなく、他者に優しさと慈しみの眼差しを向けつつ、毎日人間らしく、生き生きと、正々堂々と生きようではありませんか。

そのような私たちを神は励まし、慰め、慈しんでくださるに違いありません。